

ある Bogosloff Island は角閃石安山岩より成りよくこれと酷似してゐて、アレックト列島のものであらうとの推定を助ける傍證となる。

(但し該降灰を同島のものと斷定するものではない)

六、駒ヶ岳の玻璃質熔岩とも化學成分上に於て密接な關係を有し共に環太平洋岩域の火山岩の特性を具へてゐる。

佐賀縣の地理

(一)

小 蘭 榮

地誌の研究は地理區によつてなすべきであるが、地理區への階梯として、政治區劃を用ひた。故に、地理學的研究の結論に達する段階に至つた時には、地理區によるであらう。本誌第十三

卷第一號『佐賀縣の地理』にては、農業地理の

七、千島列島の松輪島に於ても一昨年二月十四日と本年二月十三日とに火柱天に沖する大噴火を始め、多量の礫灰を降下した。これは“Smoke”、式の噴火であつて、本文の降灰とその軌を一つにするものであらう。終に臨み本資料を筆者に提供された武文彦氏に對し謹んで深謝の意を表す。

(昭和五年七月十四日稿)

一面と人口に關する考察を記述し、説明は可及的に差控へたのであつた。本文にては、氣候及人口について簡單な記述をなし、諸賢の御指教を仰ぎたいと思ふ。

一、地形 本文。

二、氣候 本文。

三、土地の利用 地球第十三卷一號

四、産業 省略。

五、交通 省略。

六、聚落 地球十三卷一號及本文。

七、地理區 地球十三卷一號。

一、地形の概観

當地域は、北部に筑紫山系、西部に多良岳火山群があり、東南は筑紫平野となつて筑後と同様な風景形態を呈する。

筑紫山系は幾多の北西—南東・北東—南西の兩方向の斷層によつて、モザイクな構造を有してゐる。遠賀川、御笠川の地溝は重なるものであり、松浦川の斷層の谷も横斷交通路として相當に重要である。遠賀川地溝は、第三紀に沈積された本邦最盛の炭田であり、昨秋、長原線が開通してから、鳥栖久留米方面に於ける松浦炭田の市場は縮少しつゝあるらしい。

御笠川の低地には、略々中央部に太宰府があり、北は大野城、水城、南は基肄城によつて固められ、西方アジア大陸に對する前線に當り、

古來、國防上重大なる舞臺をなして來た。

御笠川低地と松浦川の低地との間に挟まれる地塊が、脊振山地である。主に花崗岩によつて構成され、一度準平原に開析され、其の後隆起し浸蝕は復活し、河床は掘下げられ、谷壁の傾斜は増大したのである。^{註1}老年期の地貌を呈するのは、隆起量が著しくなかつたか、後に起つた沈降が少々大きかつた爲であらうと思はれる。脊振山地は略々北西—南東の方向の地壘狀をなし、活傾動地塊であると思はれる理由があり、西南に群る天山地塊と共に、中央線の西部をなす松山、伊萬里線によつて長崎三角地域と接する。此に述ぶる大部分の地方に於ては、斷層變位が著しかつたらしく、朝日山等小數のケルンバットが、第四紀堆積層の上に丘陵狀をなしてゐるに過ぎない。

天山地塊、脊振山地は北西—南東の斷層線上に延長された河谷によつて、交通上の障壁をやわらげられる。其の主なもの、基山、田代、中原の三ヶ所から、各々三百二十五米、五百五

十米、五百二米（七曲峠）の峠を越して那珂川の谷に下るもの。^{註2}神埼、佐賀から各々城原川、川上川の谷を上つて、共に約四百八十米の大内峠向合峠によつて室見川の谷に至るもの、佐賀から川上川に沿つて上り、四百五十米の峠を越し玉島河谷によつて濱崎に通ずる者等である。此等は純然たる經濟上の交通路としては價值が甚だ小である。筑紫平野から福岡平野へは、少しく迂回すれば御笠川（山口川との分水界は約三十五米である）の低地によられ、唐津方面へは松浦山塊と天山山塊との界をなす嚴木川（松浦川の支流）、多久川（六角川の支流）の谷によられるからである（分水界の峠は九十二米）。

松浦山塊は第三紀（古第三紀含炭）層の波狀地に、玄武岩よりなる小丘があらはれ小起伏山地をなしてゐる。有田町附近の如く峽谷狀をなしてゐる所もあるが、松浦川本・支流、有田川等は蛇行しつゝ緩流して海に入る。^{註3}

河に沿うた交通線は峠を越す時に急坂を昇らなければならぬ。

筑紫平野は、九州で、最も農業人口の稠密な地であり、地形的には脊振、天山の兩山塊の南方が中央線を界として陷没し、脊振山塊等の土砂が運搬堆積されて成生された冲積平野である。

^{註4}

朝鮮海峽斜面の海岸地は沈降海岸の特色を示し、辻村氏によれば、沈降量は小さく、割合に新しい沈降作用は、各河川の受水區域の狭少と共に原形を留めてゐるらしい。海中に散在する島嶼には大島の如く玄武岩の噴出によつて成れるものが多い。

^{註1}

寒水川上流に於ける古田原・綾部の扇狀地、多久川上流に於ける多久原の扇狀地は、寒水川・多久川によつて開拓が進みつゝある。古田原にては東北よりの支流は本流との合流點附近で、河床は二米も高く小瀑を懸ける。

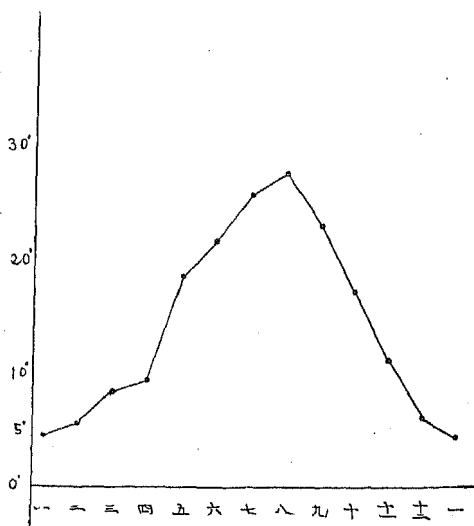
^{註2}

七曲峠を越した交通線は、脊振山塊の東北に沿つて室見川の上流に出で、脇山の盆地に通ずる。

那珂川の上流が脊振山塊の一部を横斷して（福岡平野に出る前）ゐる所は美しい峽谷をなし、筑紫耶馬溪と稱せられる。

第一表 佐賀 大正10—14年5ヶ年平均

佐賀縣の地理



註 4

土地の隆起と堆積作用によつて成生された。河川の

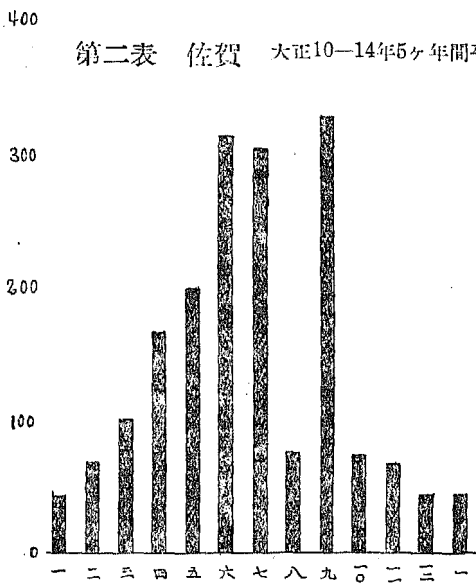
註 3

七曲峠を通ずる此の交通線は古代から重大な意義を有したらしく、寒水川が平野にあらはれて形成した綾部扇狀地と附近の山麓には多くの古墳、石器等が発見された。城址もある。

松浦川は土地の隆起によつて形成された穿入蛇行帯が、後に起つた沈降作用に影響された堆積によつて埋積されたのであるらしい。

第二表 佐賀 大正10—14年5ヶ年間平均

二、氣候



第一表、第二表は大正十年から十四年までの五年間の平均である。気温の最低は、大正十一

二、氣候

蛇行狀態を考へるならば隆起作用は極めて徐々であるか、或は減傾斜運動かも知れない。然し、之を證すべき有力な材料は有しない。干拓事業については十三卷一號を參照されし。

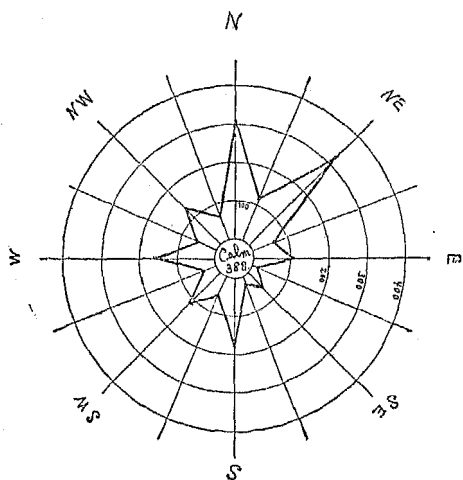
年一月攝氏二度で、最高は同年八月の二十八度七である。即ち各月平均氣溫の較差は二十五度八で相當大である。最も較差の小さいのは大正十年で、一月五度七、八月は二十七度五、較差が二十一度八となつてゐる。三月から四月への氣溫の上昇は緩傾斜であるが、四月から五月へは急に飛躍してゐる。註¹

雨量は太平洋式であるが、八月及び十月から二月までの少雨が著しい。八月では大正十一年二十耗が最少、十三年二百十八耗四が最多、十月では十年の十六耗が最少、十二年二百三耗八が最多で變化が著しい。六、七月の梅雨の候、九月の變風季に著しい雨量があるのが毎年の例である。註²

第三表は佐賀に於ける風向の觀測を方向別に圖表にしたものである。最も多きは靜穩狀態の三百八十八回十七・七%で、次は北東の三百十七回十四・五%、北の三百十二回十四・二%等である。南は百七十九回八・一%、西は百六十二

回七・三%である。註³、註⁴

第三表 風向器 觀測回数二一九一



註¹

毎日平均二十五度より高温なる日数は六月二・五、七月二十一・五、八月二十八・〇、九月八・八、合計百二十五・六日で、零度に達しない日は一月〇・八、二月〇・六、十二月〇・一、合計一・五日である。雨量の多い時季には低地は排水良好ならず、往々大洪水を來たす。

註²

註³

氣溫と降水量

氣 溫	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十 一 月	十 二 月	年
	四・五	五・六	八・三	一四・三	一八・六	二八	二五・九	二七・七	三三・一	二七・二	二一・一	一六・一	一五・三
降 水 量	四三・一	一〇〇・六	一六五・九	一九〇・〇	三三三・五	二〇四・四	七五・六	三七・八	七四・三	六六・六	一七三・八	四四・三	

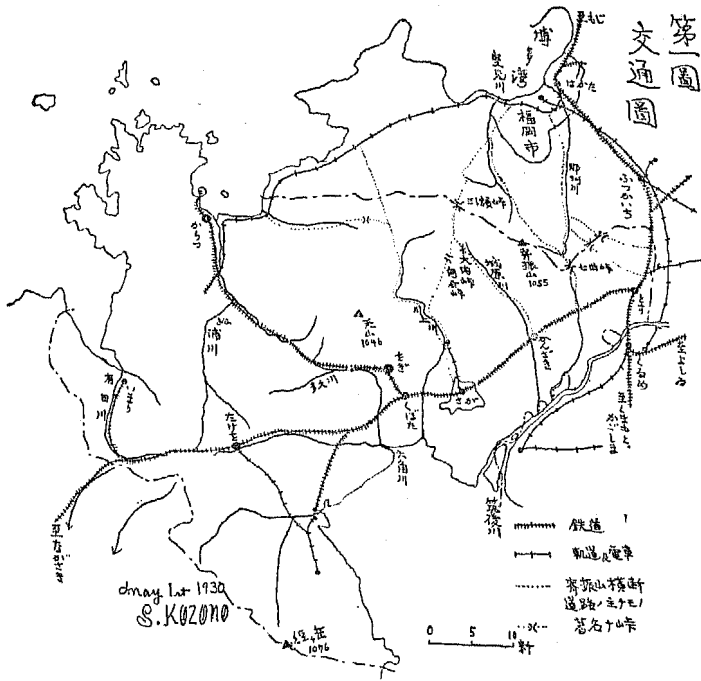
註 4 風向

	Calm	N	NNE	NE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW	
12→2月	105	78	29	69	13	20	3	9	4	18	6	20	9	60	23	55	19
3→5	86	81	28	81	15	26	4	15	6	46	14	31	9	44	14	35	16
6→8	97	50	19	64	15	30	6	20	10	91	27	43	11	30	7	18	10
9→11	100	103	39	102	21	29	3	11	4	24	7	17	5	28	9	27	17

第二・三・四・五圖は佐賀測候所（毎日六回觀測）及び九觀測所（毎日午前十時一回觀測）の觀測表によつて作成したものである。氣溫はすべて、午前十時觀測のものである。

各觀測地は、それ〴〵海拔高度を異にするが各地に於ける垂直の氣溫變化を正確に知り得ず、一つには、其の土地の氣溫を直接に知る便利の爲に、高度による更正をしなかつた。又小城、嬉野、古湯の三ヶ所の他は、二十米以下の海拔高

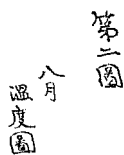
度にあり、高度百米に付き〇・五度とするも更正の値は〇・一度に達せず、更正の意味をなさないものとして除外してもよいと思ふ。小城は約二十五米の高度にあるが之をも除くならば、嬉野六十九米と古湯の二百十米とが残る。今、若し夏に於ける高度百米に付き氣溫變化を〇・五度、冬を〇・六度として算出すれば、嬉野では夏〇・三四五度、冬〇・四一四度を、古湯では夏一・〇五度、冬一・二六度を加算すればよいことになる。



第二圖は八月(最高温月)の等温線圖である。海岸地方・山地は温度稍々低く、天山山塊の東南麓から松浦山塊の東南麓に亘つて高温を表はす。

第三圖は一月(最低温月)の等温線圖である。第二圖と比較して、最も大きな違ひは、最高温の地が唐津で、之に次ぐ地の伊萬里と鹿島も共に海岸に存することである。殊に北方に開いた灣に面する唐津の最高温は注目すべきである。低温の地は多良岳火山北麓嬉野・脊振・天山山塊の山間古湯及び筑紫平野の中心佐賀である。

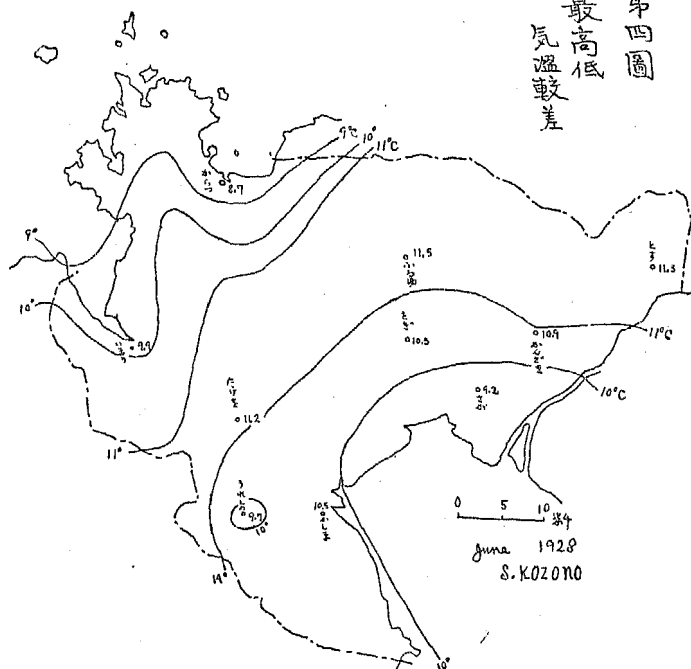
此に於て、前述の更正を二ヶ所に限つて用ひるならば、第二圖に於ては二十九度五を越す地が、古湯から西南嬉野附近まで擴る外に變化を認め得ない。即ち第二圖を直観して思考された條件の變更をなさずにすむ。第三圖に於いては、古湯



第四圖

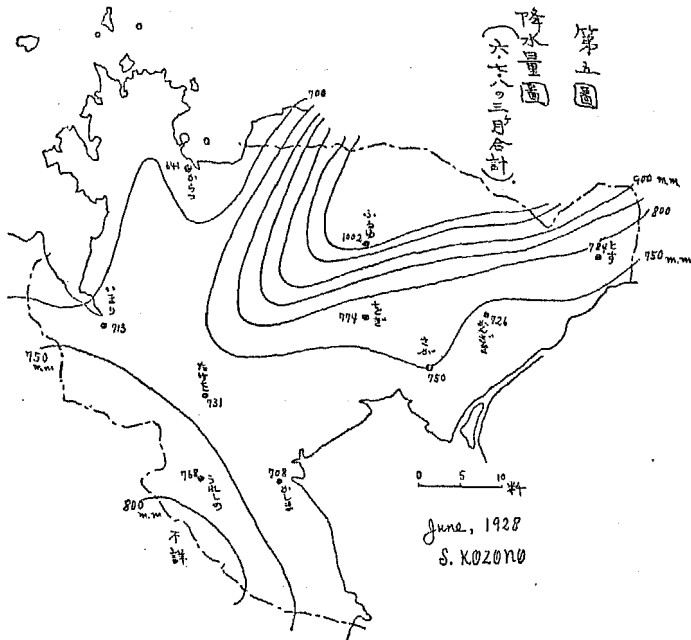
最高低

氣溫較差



は六度三に近くなり、嬉野は五度六になる。で、多良岳火山裾野を除く他の地方では多少の相違せる觀察がなされる。則ち、佐賀は平野の中心で最低温（此の低温は熊本から筑紫平野地方に擴るもの、北部をなすものと思はれる）を示し、其の他は西、或は西北より東、或は東南へ温度が漸減する。

第四圖は各月最高低氣温較差の全年平均較差を示したものである。最も小なるは、唐津の八度七で、十度に達しないのは佐賀・嬉野・伊萬里の四ヶ所である。最も大きいのは古湯の十一度五で、鳥栖の十一度三が之に次いでゐる。之を要約すれば、多良岳火山地から松浦山地・脊振山地を経て東方へ擴る地は、氣温の較差が大きく、朝鮮海峡沿岸最も小さく、有明海沿岸が其の中間であるといへる。註5



第五圖は六、七、八の三ヶ月合計降水量分布圖である。三ヶ月合計を用ひ、全年のを省略したのは、分布の型式に少しも變化がなく却つてより一層明瞭なる爲である。唐津は全年にても最も少く一千六百二十四耗、古湯は最も多く二千三百九十五耗である。脊振山地天山山地及び、多良岳火山地方は降水量多く註⁶ 松浦山地から筑紫平野一帯は割合に少い地方である。註⁷

湿度は全年平均では、小城の七十%六と鹿島の七十七%四との間であり、朝鮮海峽斜面の唐津、伊萬里は一月も七十六%を超え、六月最も大で八十%前後に及び、三月、十月頃が七十二%近くである。夏季に湿度の大なるは暑さの感じを増大するものであるが、常に海風が存する爲に之を和らげ、佐賀縣では最も良好なる氣候の地であらう。註⁸ 筑紫平野の各地では―鹿島・嬉野を除く―冬小さく、六、七月に最大に達する。湿度の多少を風向

と關係せしめて考察すると次の如くである。筑紫平野では、各々東風(武雄・鹿島)・西風(嬉野)・北東風(小城)・南風(鳥栖・神埼・佐賀)の多い時季に湿度が大であり、其の正反對の風向の時、小なる傾向が著しい。古湯では北風が卓越し、南風の時は湿度が小さい。唐津・伊萬里では共に北風が卓越し、南風が卓越する七、八月には乾燥する。註9、註10

右を要約すれば、脊振山地は氣溫低く較差大きく、雨量は多い。松浦地區は雨量少く氣溫の較差は中等であるが、海岸地では氣溫の較差小さく最も溫暖である。これは對馬暖流の北上する海洋と、卓越北風との影響と思はれる。筑紫平野は雨量は西南部鹿島地方に少いが概して農耕には十分である。氣溫の較差は山地に近づくにつれて増大する。一般に風向は北及北東が多く南が之に次ぐ。

以上にて簡略に佐賀縣地方の氣候條件の數ヶを記述した。精密な氣候學的研究は本文の目的でなく、又、此には詳細な研究をしなくとも大なる支障を來さないと思考する爲に、詳細は後の研究に待つことにする。

註5 絕對最高溫度の極は武雄に於て明治四十三年八月十五日攝氏四十一度五に達し、最低溫の極は鳥栖に於て明治三十五年二月十五日攝氏零下十八度三に降した。

各月平均溫度の全年較差

古湯二十四度四	神埼二十二度九
嬉野二十三度九	鳥栖二十二度八
武雄二十三度三	鹿島二十二度四
佐賀二十三度三	唐津二十二度四
小城二十三度二	伊萬里二十一度五

註6 多良岳火山附近は霧多く、航空路として危險な地方である。太平洋橫斷飛行研究中の後藤飛行士の遭難地である。

昭和四年度旱魃は松浦半島から杵島、藤津兩郡に著しかった。今、各郡の田地面積に對する溝渠、溜池沼池等の百分比を示せば次の如くである。

佐賀市 一〇・二 %	東松浦郡 五・二
佐賀郡 〇・六	西松浦郡 七・六
神埼郡 一二・六	杵島郡 三・六
三養基郡 八・四	藤津郡 六・四

小城郡 一・一 縣

四・九

佐賀郡・小城郡は非常に溜池等が少い。縣全體では五
%に達しない。佐賀市の水道・杵島郡・藤津郡にては灌
漑用として地下水が利用される様になった。

註8

此の地方(朝鮮海峡沿岸)の十二、一、二月頃の氣溫
濕度、風速等は人類の精神活動に最適のものであら
う。

註9

風向及濕度(最多風向と濕度)

新譯日本地學論文集 (五)

ライマン——日本油田調査第二年報 (一)

本篇はライマン(Benjamin Smith Lyman 1835—19

67)の著。

20)の Report on the Second Year's Progress of
the Survey of the Oil Lands of Japan. Tokyo, 1878.

調査事業沿革

を譯述したもので工部省の出版にかゝる。ライマンの主

要な報告である北海道地質概報を載せなかつたのは當時

日本譯の刊行されたものがあつたからこの一篇を選んだ

謹んで一八七八年一月に至る日本油田調査の